

## 日本の磁器の花

文 部 省 特 選  
芸 術 祭 大 賞  
教育映画祭文部大臣賞  
最優秀作品賞  
ゴールドマーキュリー  
国際映画祭金賞  
毎日映画コンクール  
教育文化映画賞  
東京都教育映画祭  
最優秀賞



# 色 鍋 島



### ■ 解説

この映画は国の重要無形文化財に指定された色絵磁器「色鍋島」の技術記録である。日本の磁器の発祥地となった佐賀県有田地方は、間もなく色絵磁器を生んだ。柿右衛門、古伊万里、色鍋島がそれだ。磁器をつくったのは、文禄・慶長の役後、九州各地に渡来した朝鮮の陶工の一団、李参平らだが、それに赤絵を付けることに成功したのはかの陶工柿右衛門で、長崎に入ってきた明の赤絵の製法を習って工夫したものとされる。古伊万里は輸出のものとして海外に知られ、色鍋島は鍋島藩主が将軍家や他藩主への贈答用に焼かせた精巧な色絵磁器だが一般にはほとんど知られていなかった。

色鍋島は、形、文様ともに優雅な特色がある。文様も染付（藍）や赤絵の重ね方も、江戸時代の染織の技法に通じるものがある。工程数が多く統一性のある見事な分業で作られ、元禄～享保期に完成された江戸の工芸技術の粋を示すものであろう。

各工程とも、職人が工夫し伝えてきた様々な道具が活躍する。それらは素朴で何の見てくれもない。名前も職人が長い間呼びならわしたものでおもしろい。

映画は、手わざにつながるすぐれた伝統技術を守ることが、私たちの今の生活を豊かにするすぐれた財産であり、将来に伝えなければならないことをも静かに訴えてくる。

### 企画／文化庁

### 製作／株式会社

#### ■ 製作スタッフ

脚本……………村山 英治  
監督……………  
撮影……………木塚 誠一  
照明……………山根 秀一  
編集……………長谷川 宜人  
音楽……………長沢 勝俊  
解説……………観世 栄夫

## ■ あらすじ

映画は18世紀始めの最盛期の作品の紹介からはじまり、それらを生んだ藩窯の跡を訪ねる。

陶器、いわゆる土ものの原料は土だが、磁器の原料は石である。硬い陶石を砕いて土にし、ねって、ロクロにかける。牛の舌と呼ばれる長い伸べらでひろげ、押べらに代えて正しい形に仕上げる。色鍋島の代表的な形は高台のある大鉢（大皿）だが、映画は角皿を作る型打や、変型皿を作る糸切りの技法も興味深く見せる。

素焼がすむとまず下絵付にかかる。昔の色鍋島は形、寸法はもとより、文様も本藩から紙に書いて渡された。線書は男の仕事、その中に絵具を塗って濃淡の調子を出す濃みは女の仕事である。濃みは特に道具と職人の手が一体になった手仕事の、息づかいが微妙に感じられる。

色鍋島の地肌の美しさは柞灰釉でなくてはできないという。鹿児島県大隅半島に繁茂している柞の木を皮を灰にし、その微粒子を、長石などから調整した釉薬と調合する。

本焼の窯詰めは大事な仕事なので、窯元が先に立って積む位置をきめる。陶工たちが一番緊張するの

はこの本窯で、焙り焼き16時間、900度で火前に詰めた器物の釉薬が溶けてガラス状になる。攻め焼き19時間で見通し（正面）の釉薬が溶け、最後のあげ火が5時間。このとき窯の中は1300度を越える。この高い火度をくぐって堅い素地と美しい染付ができる。3日後、窯の冷却を待って窯出しが行われる。鮮かに下絵の染付が発色している。

色鍋島に用いる上絵具の精製には今泉家だけに伝わるタテワケの技法がある。昔は赤絵の秘密を守るために家督相続は殊のほか厳しく、今日まで一子相伝の形で傳承されてきた。

絵具は摺れば摺るほどよい。上絵（赤絵ともいう）の絵書座の職人たちにとって、絵具の摺り合せは日に何べんも長時間繰返す大切な仕事である。上絵も男の線書から始まる。ここでも濃みは女の仕事。色鍋島の精巧さは、藩窯時代以来一貫して、統一性のある分業的製作方式によって保たれてきた。

手わざにつながる技術は、一度絶えるともう二度とかえってこない。職人たちはそういう技術を守って、昔の形や文様を手がける一方、伝統技術を今の生活に合った形やデザインの作品に積極的に生かすことによって、後世に伝えたいと願っている。

## ■ すいせんのことば

美術評論家 岡田 譲

この映画は文化庁が純粋に技術記録として残すために製作したということだが、見終わって深い、そして爽やかな感銘を覚えた。精緻で、端麗な色鍋島独自の美しさを画面の上で決して謳いあげているわけではないのだが、その美しさに強く打たれた。造形的な美しさだけではない。職人たちの仕事ぶり、その手の動きのようなものまでにも少なからず感動させられたのである。

永い年月に練り上げられた手仕事の伝統の厚みがつくる人の手に凝縮され、それがおのずと画面に滲み出し、みる人の心を捉えるのであろうか。

これはまた、この映画の制作者が歴史的な時の流れを十分意識しながら伝統技術を冷静に、それこそ醒めた目であるがままに描いたことの賜ものでもある。それによって予想もしなかった画面的な密度や迫力の生まれてきたことも考えられる。ともかくこの映画は一般の人びとにも深い印象を刻みつけるであろう。

## 日本文化シリーズ

和菓子 カラー26分

石の文化 カラー29分

今は昔志野と翁

カラー39分

明治の洋風建築

カラー28分

にっぽん・チーズ・  
ものがたり

カラー27分

案ズルヨリ産ムガ  
易スシ

カラー24分

株式会社

桜映画社

東京都渋谷区代々木1-57-1 代々木センタービル  
〒151 TEL 03(3320)6311 FAX 03(3320)7666

配 給

領布価格 ￥195,000